



浦島伝説の近代化をめぐるって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学語学文学会 公開日: 2017-04-20 キーワード: 作成者: 大塚, 達也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00010645

浦島伝説の近代化をめぐる

はじめに

『螢雪時代』など受験用出版物で名高い旺文社が、かつて広く豊かな教養を培うために「学生ライブラリー」と称するシリーズを出したことがある。その一冊に片岡良一著『近代日本文学教室』（昭和三十一年十二月）がある。そこで片岡良一は「近代日本文学の基本的性格：浦島伝説の近代化を通して：」と題して、島崎藤村の「浦島」、森鷗外の「玉篋両浦嶋」、坪内逍遙の「新曲浦島」の三作を取り上げて、近代文学のメルクマーを指摘している。この三作に共通するのは伝説にある神秘主義的傾向を否定し何よりも人間や現実を重んじようとする現実主義・写実主義の精神であり、そこに近代文学の特質があるとするものである。この指摘はもはや常識化しており、このような見方を近代文学史叙述が長く踏襲してきたことは周知の事実である。しかし、ここで注目したいのは導入の仕方である。つまり浦島伝説の近代における改作から始めていることである。管見によれば、このような文学入門の試みは片岡良一の上記の

大塚 達也

書のみである。

本稿ではその可否を論ずるつもりはない。ただひとつ問題なのは、浦島伝説のパロディーから幸田露伴の「新浦島」をはずしたことである。学生向けの出版物であったため、難解な露伴を避けたのかも知れない。あるいは仙道と魔道は近代のメルクマーとしてふさわしくないと考えたのかも知れない。いずれにしても片岡良一が「个性的分化の著しさもまた近代文学の著しい特質の一つ」と言うのであれば、幸田露伴をはずすわけにはいかない。

近代化についてしばしば引き合いに出されるのが、夏目漱石の〈外発的〉という言葉である。しかし一方で、〈外発的〉でない〈近代〉などあり得ないとする見解もある。それ以来、日本の近代化はカッコ付きの〈近代〉としてしか語れなくなった。本稿では片岡良一の副題を借りて、〈近代〉において浦島伝説の改作がなぜ行われたかを考察する。その前にアーヴィングの「リップ・ヴァン・ウインクル」の翻訳を取り上げる。

ワシントン・アーヴィング(Washington Irving, 1783—1859)の短編集『スケッチ・ブック』の一篇「リップ・ヴァン・ウインクル」はドイツの民話をアーヴィングがアメリカの物語に仕立て直したものだといふ。森鷗外（1）の「新浦島」(初出の題「新世界の浦島」、明治二十二年五月—八月『少年園』)は独訳からの重訳である。

亀井俊介氏はアーヴィングについて、次のように書いている。

明治四年に渡米してハーヴァード大学で学んだ金子堅太郎は、帰国後、『当世書生気質』(明治十八年—十九年)を出した坪内逍遙に、「アーヴィングをくり返して、暗記するほど読みなさい。スケッチ・ブックの文章を自家薬籠中のものとしておけばまちがいない」と語ったという(木村毅『日米文学交流史の研究』)。英語を学ぶ明治の学徒は、多かれ少なかれ、こういう態度でアーヴィングの文章に接したようだ。英語の教科書には、アーヴィングがよく収録された。もちろん、『スケッチ・ブック』そのものも教科書にされた。その注釈本もいろいろ出版されている。

これによってアーヴィングの『スケッチ・ブック』が明治の学生に広く読まれていたことが分かる。当然その中の一篇「リッ

プ・ヴァン・ウインクル」にも多くの学生が目を通していただろう。その概要を最初に(明治十五年十一月、『東洋学芸雑誌』)日本に紹介したのは、理学博士久原躬弦であった。衣笠梅次郎氏の論考「リップ・ヴァン・ウインクル」の渡来（2）がそのことを伝えている。博士の論稿「有機化学ノ講究」には次のようにある。

「氏ハ合衆国ノ尚ホ英国ノ版図ニ隸属タリシ時ニ方リテハドソン河辺ノ小村落ニ住スル獵夫ナリシカ氏一日職業ノ為ニカツキル山ニ入り東走西奔シテ禽獸ヲ驅逐シ漸々進ミテ深林幽谷ノ絶テ人跡ナキ処ニ到リ又此時夥多ノ怪状異形ノ動物ニ邂逅セシカ怪物ノ氏ヲ待ツニ恰モ客ヲ迎フルカ如ク一種ノ酒ヲ以テ之ヲ勸ム氏ハ大ニ喜テ之ヲ飲下セシニ其味頗ル甘味ニシテ忽チ酩酊シ覚ヘス石上ニ枕シテ熟睡シ終ニ醒サル事茲ニ凡ソ二十年其間ニ方リ米國ニ於テハ夫ノ革命ノ乱起リ終ニ獨立シテ合衆國体ヲ建テワシントン氏ヲ挙テ大統領トナセリ偕テリツプヴァンウインクル氏ハ二十年ノ星霜ヲ一夢ニ経過シ醒テ後我村落ニ帰ルニ方リテハ曩キニ氏ノカツキル山ニ登ラサル前ハ英國王ゼオルヂ三世ノ代ナリシカ今ハワシントン氏ノ治世トナリタル以テ百般ノ事総テ一変シ目ニ見耳ニ聞クコト悉皆新奇ナラサルナキモ全ク一睡二十年ノ間ニ更迭改良シタル事ハ毫モ之ヲ知ラサルヲ以テ心中頗ル混雜ヲ極メ進退此ニ谷マルノ思ヲナセリト」

なぜ化学者が「リップ・ヴァン・ウインクル」を紹介したかという問題については衣笠論文に譲るとして、これはまさに新世界（アメリカ大陸、The New World）の浦島と呼ぶにふさわしい物語である。浦島伝説は外国にも類型を有すると言われているので、ドイツでもアメリカでもこの種の民話が残っているのである。ちなみに、右の梗概を田部重治訳^③で補っておく。

彼の祖先はピーター・スタイヴェサント騎士道時代に、勇敢に頭角を現はし、彼に従つてフォート・クリスチナの包囲攻撃におもむいたヴァン・ウインクル一族であった。彼は、しかし、彼の祖先達の勇ましい性格はほとんど何も受けついでるなかつた。私は彼がお人よしの善良な男といったが、その上に彼は親切な隣人であり、女房の尻に敷かれる従順な亭主であつた。（中略）

リップの気質の大きな誤りは、どんな事でも利益のある仕事に対しては、我慢できないほど嫌ひだといふことだつた。それは勤勉とか忍耐とかの欠乏のせるではなかつた、といふのは、彼はよく、ぬれた岩の上に韃鞣人の槍位長くて重い釣竿を持つて座り、たとへ一度も魚が餌を咬むことにより勇気づけられなくても、一言もこぼさずに一日中釣りをやるのだつたから。彼は何時間もつづけざまに鳥銃をかついで森や沼の間に足を引ずり歩き、丘をのぼつたり、谷を下つたりして、二三日のりすや野鳩を射るのだつた。（中略）

可哀相なリップは遂に、ほとんど絶望におとし入れられた。そして畑の仕事と妻の喚き声から逃れる彼の唯一の方法は、銃を手にして森の中へとぶらぶら行くことだつた。

山田美妙編『新体詞選』（明治十九年八月）に「リップ、バン、ウンクル」と題する新体詩が収録されている。「リップ、バン、ウンクル」とは、言うまでもなく「リップ・ヴァン・ウインクル」のことである。その梗概を十節にわたつて展開したものである。作者は「かをる」と署しているが、丸岡九華だとされる。前書きには「其説く所、浦嶋の子の話、武陵石室山の話など、同一轍ながら、唯珍らしき儘こゝに掲げつ」とある。ここではその第九と第十を掲げておく。

第九

|| 自由よ自由。勝て自由。
互に競ふ折からに、
寄近づきて打向ひ、共和主義にて在すか。||と
|| 小可ハ昔の好誼にて、
いふに那方は眼を瞋らし、
逃来りし保守党よ。
一時にかゝる暴民を、
リップハ向ひ、|| 喃紳士。
共和よ共和。やぶれな||と

一人の紳士ハウンクルに

君ハ自由かあるハまた、

問ハれて這方は驚きつ、

帝ジョージに従はん。 || と

君ハ此奴ハ英国を、

殴てよ。叩けよ。斬殺せ。 || と

支へつ来る老人に、

君、ニコラスを知給ふか。 ||

何ニコラスと・・・ニコラスハ、

然バリップを知給ふか。 ||

リップハ二十年前に、

二十年前に死なれたり。 ||

なにリップとか。あ、リップ。

山に入りしが帰来ず。 ||

第十

家を出でしハ昨日ぞと、

いつかハ過ぎし。此我ハ、

実の我か。或ハ又、

わが妻も子も尋詫び、

さすが堰来る血の涙、

暫と留むる人見れば、

君ハ何故リップをバ、

我名はいはじ。君が名は || . . .

御身の父の名ハ何と || . . .

志て母上ハ如何せし。 ||

後に空くなりたまふ。 ||

おんミの父ハこのリップ。 ||

思ひしものを二十年、

一度こゝに住ひたる

是ハ我身に非ざるか。

怨詫びつゝ、在ならん || と

拂つ行んとせし折しも、

年まだ若き女なり。

尋給ふぞ。君が名ハ || . . .

昔ジュデアと呼ばれたり。 ||

それこそリップウンクルと . . .

父が家をバ出給ひし

あゝ、娘。あゝ、娘。

何こハ父か。こハ父か。 ||

(ルビ省略)

このように「リップ・ヴァン・ウインクル」は明治十年代後半にすでに紹介されていたことを確認しておきたい。その本格的な翻訳が森鷗外の「新浦島」(「新世界の浦島」)であったのである。

林晃平氏は「浦島伝説は、明治初期になっても、江戸からの流れで子供向け赤本などが刊行される一方、鷗外は二十二年アーヴィングの「リップ・ヴァン・ウィンクル」を「新世界の浦島」として翻訳紹介している。『浦島次郎蓬萊噺』はそうした時期に江戸時代の雰囲気を引きずった滑稽本の流れで書かれていたのである。しかし、透谷が構想したような、明治を迎えた新しい視点からの文学も既に始まっていた。そして、『浦島次郎蓬萊噺』の発表から四年後には、今までにない新しい浦島像をもって露伴の「新浦島」が発表されるのである⁽⁴⁾と書いている。幸堂得知『浦島次郎蓬萊噺』（明治二十四年十二月）については、林氏の『浦島伝説の研究』に詳しい。露伴に関しては「露伴の「新浦島」の題名に「新」がついているのは、彼の描いた浦島が人間の普遍的欲求を乗り越えて、なおかつ神仙世界を欲しているところにある。つまり、得知の浦島次郎が求めたものを否定したところから、出発したところにあるのである。新しい浦島伝説はここに始まったのである」としている。これに対して、近代文学の研究者の見解は違っている。まず、東郷克美氏の論考「御伽草子と近代作家―明治の浦島たち⁽⁵⁾」により、露伴の「新浦島」（明治二十八年一月）の梗概を掲げておく。

「新浦島」は浦島太郎の弟より数えて百代目の浦島次郎が

仙道を志してならず、魔道に入る物語である。天の橋立近くの九世渡の漁師の一人息子である次郎は、早くから都に出て学問をし詩歌でも名をなしたが、七条三位の姫との恋に破れ、その人に倂の似た町家の娘を愛するようになったのも束の間、恋人は死んでしまう。失意の次郎は遊里に足をふみ入れ、勇菊という女と馴染んだが、その女にも愛想がつき、東京に出てみたものそのも不快なことばかり、都も嫌なことが多いので、清貧の暮しをするつもりで、二十五歳のときに父母のもとに帰って来る。両親はよろこんで家を譲り、一夜のうちに昇天してしまう。次郎は天上の父母が恋しく、人間界がいとわしくなると、仙道に入ることを志したが、それが難しいことを知ってまず魔道を修しようと考え、聖天毘奈耶伽王を呼び出す。現れた聖天は、魔道によって仙に至ろうとする欺瞞をばげしく叱責した上で、次郎の分身を同須と名づけて魔族に入れ、次郎の使役に供することにした。次郎は同須の魔力によって唐土驪山の温泉に浴して美女にかしづかれ、九世渡に帰ると漁村は一変して金殿玉楼酒池肉林に化していた。これが同須の非道によってもたらされたものであることを知って怒った次郎は、玉楼を廃してもとの陋屋に住み、額に汗する生活に入る。こうしてようやく魔道を脱しえたと思つているところへ、かつての情人勇菊が訪ねて来る。処置に困って同須に命ずると、彼は勇菊を三年間化石にしたので、次郎は彼女をもとの状態に復させ、「自業の悪果」として自分を

化石にさせる。勇菊は泣く泣く九世渡を去つたが、「次郎は今に化石せしま、靜に生死の外に在りとぞ」。

東郷氏は、「古代以来浦島伝説には、神仙思想が色濃く影をおとしているが、これはその神仙的なものを信じていることのできなくなつた浦島末裔の物語だ」という。これは林氏が、「神仙世界を欲している」ところに「新」と題した意味があるとすると、それは明らかに違つてゐる。なぜこのような理解の相違が生じたのか。林氏は別のところで、「露伴の次郎は、学問を捨て、恋愛を捨て、東京の生活を止めて故郷の漁師をしようとしたのである。しかし、そこで自分の家柄が神仙に係わることを知り、最後の望みをそれに託した。彼の望むことは、俗世界の富でも愛欲でもない。厭う俗世を離れ神仙の世界に入ることだけなのである」とも書いてゐる。東郷氏のまとめた概要を見ただけでも、「神仙世界を欲している」とは言い難い。露伴が「新」と冠したのは、〈近代〉に成立した都市とそこに住む人間の猥雑さを浦島伝説を借りて表現しようとしたものだと思ふ筆者は考へてゐる。「新浦島」の「其八」には、次のようにある。

次郎生れて以来此様なさましい女に仮初ながら此様な悪縁を結びし事かと一念發起しては矢も楯もたまらず、夢窓国師が其往時美女に執念く纏はれし苦みも如是やと弱りきつて、愛想つかしの烈しき置手紙を遺したるまゝ、まだ見ぬ東京へと

心ざし上りしが、何処も齡長けた眼で見ても汚穢いことばかり、ほとく世間一般の人が餓鬼か畜生とよりほかは見えず、学者が世間の鼻息を伺ひ、紳士が落語家幫間の真似をして悦び、寺を建立した人を奇特などおもふて見れば幾千人を泣かせた悪名消さうとて高利貸のする業、皇国のためとえらさうに集まつた人が此の公債の利子が四分と定つても六分と定つても大分濡手粟の仕事があつたものを惜しいことに五分と平に定つたで動揺が足りぬと腹では呟き、経済が紊乱せねばどかまうけが無く詰らぬと啣ち、去年の早がもう一層強かつたら好かつたものと溢し、坊主が訴訟事ばかりして、王法を擁護すべき筈の仏法をもつて王法の孫庇借りて余命を維ぎながら高慢顔ばかり昔時の如く、嫉妬偏執俗人より烈しく、口頭法論腹貯金、保険の無尽のと現世の世話焼には能く手がまはり、華士族平民、吏農工商どれからどれまで陰険（陰険）猾奢侈惰弱の風に染むもの多く、花合はせ知らぬものは馬鹿と相場が定り、芸者買ひせぬものは野暮天と誇られ、地道行くものは鈍いと蔑視まれ、都て人の悪い噂は信じて美しい談は表面な事と信に受けず、神仙聖賢の尊いことは無いものにして退けて、自己が小才覚を正宗村正と振り舞はし、蠅の羽た、き蚤の高飛び、よい気になつて誇る醜態、見る眼も痒いやうな心地して厭でく叶はず、また京都へ戻りて此処も五月蠅く、味淋の入つた煮物食ふて滑りのよい畳の上に居やうとおもへばこそ骨も折れ肩も張れ、家に帰つて働いたゞけを食ふて行

く分には物も入らず気も忙しからず清貧に甘んずるが一と思ふて、せめてはこれから年老られた両親に孝行と帰宅つて見れば、忽然として此の御往生、(下略) (ルビ省略)

林晃平氏は、「浦島伝説の流布を考えた場合、教科書の果たした役割は否定できないものがある。特に国定教科書の場合、それは多大であった。統一された内容が全国津々浦々に行き渡り、そして、それが特に浦島太郎の場合、実に五十年以上にわたって採用されていたことは、世代からいっても二世代以上にもわたり、例えば昭和二十年代においては一家中が浦島伝説を教科書から享受していたといってもこともあながち否定できないのである」と指摘している。しかし、それは明治三十七年からであり、そこには浦島太郎は登場しないという。国定教科書による浦島伝説の流布は、筆者の抱く〈近代〉に入ってからなぜ浦島伝説が《改作》されたかという疑問を解く手がかりにはならない。筆者は前に、明治時代にアーヴィングの『スケッチ・ブック』が流布していた事実を紹介した。そこに収録された「リップ・ヴァン・ウインクル」が少なからず影響を与えただろう、というのが筆者の推測である。繰り返すが、森鷗外も明治二十二年に「新浦島」と題してドイツ語から訳出している。以下に露伴以後の展開を概括しておきたい。

三

島崎藤村の「浦島」(明治三十三年六月、『新小説』)は『落梅集』(明治三十四年八月)に収録されている。五七調の五連からなる詩である。その第五節を引く。

龍の宮荒れなば荒れぬ

捨てて来て海へは入らじ

あ、君の胸にのみこそ

けふよりは住むべかりけれ

剣持武彦氏の注釈⁽⁸⁾によれば、「海神の娘である身が人間である浦島を恋い、浦島と結婚することによって父なる海神が怒り、海が荒れようともはや海へは帰らぬ、浦島の愛にこそ生きたいの意」だという。また「この詩ではアンデルセン童話の「人魚姫」のように乙姫の方から人間の世界の愛に生きたいと願う」のだとも注している。

片岡良一は「わだつみ(海)の神のむすめの乙姫」が、人間浦島といっしょに生活することを願って、「捨てて来」た竜宮の荒れることなど全然問題にしまいと生きているのだから、なによりもこの現実の人生を尊び、現実の生活に価値を見出し「るのである」といい、「近代が人間とその営む現実の生活や彼らの住む現実の世界をなによりも尊んでいる」ところに、近代

文学のメルクマールを見ている。

藤村の場合は、両者とも妥当な解釈だと思う。

森鷗外は「玉篋両浦嶋」（明治三十五年十二月）を歌舞伎發行所刊の小冊子に「森林太郎作」の署名で発表した。林氏によれば、「鷗外は、近松『浦島年代記』と為永『浦島太郎倭物語』を除いて、その引用を古代の作品に限っていて、中世から近世の所謂御伽草子の浦島太郎には一切言及していない」という。鷗外は「玉篋両浦嶋自註」（明治三十六年一月）でこの作品を書くにあたって、浦島伝説に関する古代からの文献を渉獵したと語っていた。再び東郷克美氏の論考から梗概を引く。

上ノ巻下ノ巻からなるが、上ノ巻では龍宮で地上の夢をみた浦島太郎が、ながい年月の「平和に倦み」何か「事業」がしたくなって、乙姫に別れを告げて人間界に帰って来る。下ノ巻は、三百年後の後ノ太郎の時代。「色黒く逞しき士」である後ノ太郎はその武名を「とほき化外の地」にとどろかせようとして、故郷の丹後筒川を船出しようとしている。そこへ太郎がやって来たので、「かしまだち」の妨げをするのかと、その玉匣を取ろうとすると蓋がとれて中から乙姫の涙の真珠がこぼれおち、白雲が立ちのぼって太郎は白髪になる。太郎はその「たま」を後ノ太郎に与えて出陣を励まし、「事業をわかき わがすゑに／つたへおこなふ ことをうる、／これ

もひとつの不老不死。」といって後ノ太郎を見送る。

「玉篋両浦嶋」は日露戦争の直前に作られたものである。日露戦争が勃発したのは、明治三十七年の二月であった。「ロシヤ討つべし」という喧々たる世論は、その三、四年前から沸き起っていた。東郷氏は梗概に続けて、「事業」への志を後代に伝えるというかたちでの生の連続性も「ひとつの不老不死」だとする考えは、いかにも近代的解釈だ。また後ノ太郎を外敵征服のために出征しようとする武士と設定したところなどは、軍人森林太郎の作であることを示すものというよりは、やはり日露戦争直前の時代を反映しているだろう。それにしても、何と現実志向的な浦島像であることか」と言っている。片岡良一は、「話全体としては帝国主義的な侵略主義の思想と結びついており、そこに日露戦争をま近にひかえた明治三十五年という時代の空気を反映するものがある、それだけ今日の読みものとしてはふさわしくないものが含まれている」と批判している。片岡良一は後に明治近代を暗く塗りつぶした張本人と名指しされることになったが、氏が太平洋戦争の反省を踏まえて右のように発言せざるを得なかった事情も分からぬわけではない。

たひらかなるにも やすきにも

ほどもこそあれ。 わがむねの

さばかり悶え もだえしは

この平和にこそ よりつらめ。

さきに風波を ゆめみしとき、

身うち の 血 汐 沸 き 返 り

気 も 晴 晴 と なる ほど に、

ひごろのうたがひ やぶれしぞ。

色も香もある おことを棄て、

このみやゐを たちさらんは、

こころぐるしき かぎりなれど、

おことは自然、 われは人、

おことは物の おのづから

成 る をよろこび、 われはまた

ことさらに事を 為 さん とすれば、

ふたりのこころは 合ひがたし。

片岡良一が「浦島が竜宮の歓楽などより現実の人間生活の緊張のほうが少ないとも人間にとってはずっと生きがいのあるものだと考え、そういう考えかたから竜宮など捨ててかえりみまいとすゝる気持を示している」点では、藤村の「浦島」の乙姫に示されているものと全く同じだと言っていることに注意しておきたい。東郷氏も「それにしても、何と現実志向的な浦島像であることか」と評していたが、両者の指摘は符合する。

最後に、坪内逍遙の舞踊劇『新曲浦島』に触れておきたい。

逍遙の『新曲浦島』は、明治三十七年十一月に早稲田大学出

版部から刊行された。概要を再び、東郷氏の論考から引く。

この作品は序の幕^{マツ}、中之幕、詰之幕からなる。基本的には浦島伝説の定型に従いつつも、前述の二作（露伴と鷗外の作―注）同様に、ここでも浦島家における世代の対立が描かれていることが注目される。浦島老夫婦の一人息子は、ひとたび何かの「幻影」をみてから、親のいうこともきかず、仕事も怠けて憑きものがしたかのようにさまよい歩く。ついに絶望して自尽しようとするところへ、乙姫があらわれて龍宮へ案内する。龍宮で三年たったある日、ふときこえて来た「海人の歌」を耳にして、故郷が恋しくなり、老父母の幻をみて、宮の階段から転げ落ちたので、乙姫は玉匣を与えて、人間世界に送り返す。浦島が丹後の網野村に帰ってみると、祭の最中であつた。そして、老父母はすでになく、三百年がたつてゐることを知る。村人に「きちがい」扱ひ^{マツ}されるが、結婚したばかりの若い男女からなぐさめられる。玉匣をあけると、乙姫の幻が一瞬あらわれて消え、浦島は白頭の老人となつて、二人の男女とともに「蓬萊移さん現世に」とうたいつつ幕になる。

本間久雄氏は「二つの『浦島』―鷗外と逍遙」の中で、「序の幕^{マツ}」は丹後の国澄の江の浦。秋の夕暮。この浦島は、鷗外の『玉篋』が、龍宮滞在の浦島から始つてゐるのとはちがつて、

まだ龍宮にゆかぬ前の浦島である。彼れは理想を求めて得ず、いかに生きべきかに迷ひ悶えている青年漁夫であつた。『新曲浦島』の作者は、つまり、青年の浦島を、煩悶の児として描かうとしたのである。そして、このことは、当時の時代思潮の上から見て極めて興味のあることである。／＼明治三十年代の前半、特に明治三十五、六年は、その頃の青年に取つて、人生いかに生きべきかに悩み悶えた煩惑の時代であつた。(中略) また翌、明治三十六年の五月には、当時の第一高等学校の一学生が、人生不可解についての文字を、日光の華厳瀧の上に書き残して、瀧に投身自殺をしたといふ事件があつたが、この事件なども、当時の青年の時代的な悩みを、よく物語つてゐると云へるのである」と語っている。

東郷氏の的確な指摘を引いて、拙論の結びとしたい。

いうまでもなく、浦島伝説の核にあるのは、龍宮という異界とともに、時間の問題である。その結果、この説話はそのヴァリエーションの過程において、世代の変遷・対立のモチーフを派生させて来た。露伴は百代目の浦島を書き、鷗外も浦島とその子孫である後ノ太郎を描いた。さらに逍遙は、浦島親子とその三百年後の若者という三つの世代を登場させたのである。明治という転換期に、時代を代表する三人の文学者によつて、浦島物語のパロディ化が企てられ、それがいずれも世代的対立のモチーフを含んでいるのは興味深い。彼らが浦島伝説に着目し

たのは、その話型の中に現実を時間的に相対化しうる視点を見出したからであろう。だとすれば、それはおのずから、それぞれのかたちでの文明批評に赴かざるをえない。かくして、明治の三つの浦島物語には、三人の文学者の個性的風貌がまぎれもなく刻印されているのである。

注

- (1) 亀井俊介「ワシントン・アーヴィングの新しさ」(明治翻訳文学全集『アーヴィング集』、平成九・一〇、大空社)
- (2) 『明治文化研究』(第一集、昭和四三・五、日本評論社)
- (3) 『スケッチ・ブック』(角川文庫、昭和二八・九初版)
- (4) 『浦島伝説の研究』(平成二三・二、おうふう)
- (5) 『国文学解釈と鑑賞』(昭和六〇・一〇、至文堂)
- (6) 露伴の用いた文字は諸橋轍次他著『広漢和辞典』(大修館書店)にはない。同じ意味の語をあてた。
- (7) 『幸田露伴集』(新日本古典文学大系明治編、平成一四・七、岩波書店)
- (8) 『藤村詩集』(日本近代文学大系、昭和四六・一二、角川書店)
- (9) 『明治文学 考証・随想』(昭和四〇・九、新樹社)